

目取真

糸数禧子（昭和四年生まれ）

列車爆発 学徒隊 南部避難 収容所

配給所はいきゅうじよになつたわが家

戦前、私の家は糸数商店というお店を営んでいた。戦争が始まつてからは物品が統制され、糸数商店が配給所になつた。タバコや塩せんばいは専売で、反物たんものや靴、鍋類など、あらゆる商品がうちに来ていた。家は瓦屋カワラヤの二階建て、六三坪と比較的大きく、兄が東京の大学、姉は東京の洋裁学校ようさいに通つていて、貧しい生活はしなかつた。私は私立昭和女学校に通つていた。

列車爆発の被害に遭う

日本軍が沖縄に駐屯し始めて以来、軽便鉄道ケイベンは兵隊が使用するようになり民間人は乗車できなくなつていたが、学生は特別に許可されていた。

昭和十九年（一九四四）十二月十一日、私は学校での看護講習（六〇〜八〇人くらいの学生が受講した）を終え、那覇駅から汽車に乗つて古波蔵こはくら駅で降りた。そして古波蔵駅で、友人四、五人と一緒に嘉手納駅から来た汽車の二両目に乗つた。列車に乗る前の天気は小雨だった。

屋根のない一両目にはガソリンの入ったドラム缶が二〇缶ほど積まれていた。私たちが乗っていた二両目には屋根があり、包帯などの衛生品が載せられていた。二両目には民間人も十人ほどいて、兵隊は車両の中にはいなかったが、屋根の上に五、六人ほど乗っていた。三両目以降に兵隊が乗り、爆弾も積まれていた。兵隊も合わせて一四〇〜一五〇人くらいが乗車していて、列車は七、八両編成へんせいだった。ほかの車両には、あちこちの女学校の学生が二〇人弱ほど乗っているのが見えた。男子学生も乗っていたと聞いたが、彼らは兵隊と同じような格好をしていたため、私にはわからなかつた。

古波蔵駅では、兵隊さん（新兵しんべいで沖縄出身の人だった）が「自分たちは衛生兵えいせいへいで約六〇人いる。今日講習が終わつて帰るんだよ」と話していた。彼らの部隊の本部は高嶺村たかみねむら（現糸満市）にあるということだった。

列車は荷物があまりに重いので、自転車ぐらいの速さでも遅かった。そして、神里（現南風原町）の近く（稲嶺駅の手前で平坦な場所だったと思うが、記憶が曖昧である）まで来た時に列車が爆発した。当時は燃料が石炭で、列車の煙突から煙と一緒に上がった火の粉がガソリンに引火したようだった。私は二両目から外を見ていたので、火がついた瞬間を見た。二両目の屋根の上に五、六人兵隊がいたがみんな飛び降りた。

私もすぐに飛び降りた。一人の友人は気が動転し、燃えている列車の方に走っていかうとしたので、引っ張って一緒に後ろの方に逃げた。その時には草も全部燃えていた。私の髪の毛は焼け、両手もただれるほど火傷をしました。

後ろの方に逃げてからのことはよく覚えていない。軍が張っていた通信用の線に引っ掛かり大きい溝に落ちたら、列車がバーンと爆発していた。後ろを振り返ると列車はなくなっていた。横倒しになった車両が二つあったが、最後の車両は切れて国場駅あたりまで流されていったと、その頃畑にいた人から聞いた。

神里にいた兵隊二人が、溝に落ちていた私ともう一人を担いで丘の上にあった銭又ぜにまたの一軒家まで運んでくれた。す

でにけがをした兵隊五、六人が横たわり、ワーワーワー叫んでいた。ヤギが焼かれた時のように手も足も真っ黒に焼けて顔の皮も焼けただけ、あれは地獄だった。私の手も皮が焼けてたれていた。そこからトラックで南風原村（現南風原町）の陸軍病院に運ばれた。そこに運ばれた兵隊たちはみんな瀕死状態ひんしで「殺してくれー、殺してくれー」と叫んでいた。焼け焦げた一人の人は「寒いよー、寒いよー」と言っていた。「地獄というのはこういうものかな」と思った。

私は一週間ほどで退院した。包帯を巻いて目取真めどまに帰ったが、私の家を借りていた中隊長に頼んだら衛生兵（池山ヨシオという名前だったと思う）を呼んでくれ、一カ月ほど二、三日越しに来てくれた。火傷がひどくて薬が効かないため、薬の入った洗面器に患部をつけていたが、それがものすごく痛くて毎日泣いていた。私がいかに騒ぐので、家を貸してくれていた家主のおばさんは困っていたようだった。

一緒に乗っていた同級生一人や車掌しやうじやうさんも亡くなった。亡くなった同級生は私のすぐ目の前に乗っていた。初めは一緒に列車の外側に身を乗り出していたが、知らない男性から中に入るように言われて彼女は内側に入った。彼女は

足が速かったが、内側にいたために逃げ遅れてしまったと思う。のちに、彼女の服（服に名前を書いていた）が爆発で木の上に引っかかっていたと聞いた。別の学校の女学生たちも、列車の後ろの方を向いて乗っていたため逃げ遅れてしまったかもしれない。私は列車の外側に身を乗り出して前方を見ていて、炎が上がり兵士たちが飛び降りるのが見えたので助かった。

事故の翌日、列車に犠牲になった方々の肉片がいっぱい積まれて行ったと聞いた。バラバラになった肉片や衣服の切れ端があちこちに落ちていたり、引っかかっていたりしていた。爆発音はとても遠くまで聞こえたらしい。

日本兵は畑やキビ畑に爆弾を隠していたようだが、この事故のあとに移動させていた。

家が軍隊の事務所に接收される

武部隊たけが台湾に移動した後、私の家は暁部隊あかつきの大隊本部として使用された。本部なので事務関係の人がたくさんいて、机をいっぱい並べて仕事をしていた。家賃などの支払いはなく接收せつせうされた。そこにいた兵隊はもともと師範学校しはんの先生だった人や早稲田大学の卒業生など、高学歴の人ばかり

だった。二階で寝泊まりしていた兵隊もいたが、少佐しょうさや中尉ちゆうじは別の家に泊まって本部（私の家）に通っていた。目取真のほかの民家にも二、三人、あるいは五、六人ずつ兵隊が宿泊していた。

その頃（昭和二〇年の一、二月頃）、私は首里の民家に泊まりながら、首里の赤田あかたにあった病院（ちゃんとした病院ではなく、大きな家を借りて病院として利用していたのだと思う）で看護講習を受けていた。講習では手術の見学などをした。

梯梧学徒隊として野戦病院へ

沖縄戦が始まると、私は梯梧でいご学徒隊（昭和女学校の生徒たちで編成された学徒隊）に動員され、ナゲーラ壕（現南風原町）に開設された野戦病院で勤務することになった。ナゲーラ壕では首里高女（沖縄県立首里高等女学校）の学徒たちも勤務していた。負傷した兵隊がどんどん入ってきて、便や尿、けがの臭いが漂い、ウジ虫もたくさんいてろくな治療もできなかった。負傷兵は常時二〇〇〜三〇〇人ほどいて看護の人手は足りていなかった。

私たちは包帯の交換や、傷口にわいたウジ虫の除去、排

泄物の処理などのお手伝いをした。遺体は、艦砲弾かんぱうだんが落ちた穴に兵隊が埋めていた。

ある晩、壕の出入り口で一人の兵隊がみんなに取り囲まれながら、「みんなが死んでも自分は生きて帰るんだ」という話をしていた。その近くには、艦砲射撃でできた穴に雨水がたまってきた池があった。私はそこへ足を洗いにいくこうとしたが、兵隊の話を聞くため途中で立ち止まった。すると一分もたたないうちにパーツと明るくなって攻撃を受け、みんな一斉に壕に入った。私の隣に立っていた国吉さんという同級生が「手が切れたー手が切れたー」と言い、軍曹ぐんそうが抱いてすぐ治療室に連れて行ったが、爆弾の破片が肩から心臓に入ったようで十分ほどで亡くなった。話をしていた兵隊もけがを負って一週間後に亡くなった。爆弾は私が足を洗おうとした池に落ちたようで、私の友だちは水をいっぱいかぶり、それが血だと思って大騒ぎしたが無事だった。

死んだ人が羨ましかった

首里にも機関銃きかんじゆうの音が聞こえ始めた頃、第三十二軍の司令部れいぶが鳥尻に移動したという話が入ってきた。ある日、壕にいた軍医が「家族のいる人は帰っても良いよ」と言った

ので私含め鳥尻出身の人たちは壕を出た。私が出発した後
のことはよく分からないが、国頭方面から来た人たちは残っ
ていたようだった。歩ける負傷兵は一緒に壕を出たが、そ
れ以外の人には注射を打ったという話を聞いた。

私は夜間に南風原を通って大里へ帰った。兄は兵隊に行っ
ていたため、両親、姉、私の四人で避難し、親戚たちと合
流して玉城村（現南城市）船越ふなごしの大きな壕に避難した。

はじめのうちは穏やかだったが、ある日誰かが「糸数に
アメリカ兵が上って行くのを見た」と言い、糸数と船越は
すぐ近くの壕の中は大騒ぎになった。その後どのよう
に行動するか、親であっても自分の子どもに命令すること
はできず、「もう自分の思うとおりにしなさい」という感じ
だった。壕に残ってそこで捕虜になった人もいるし、壕を
出て亡くなった人もたくさんいた。

私たちは「家族みんな一緒に逃げよう」ということになり、
イージョウ墓まという大きな門中墓もんちゆうまに避難した。その翌日に
墓を出て糸満の真壁まかべに向かって逃げた。

ものすごい攻撃の中を家族と一緒に逃げ回る中、負傷し
てウジ虫がたくさんついた状態では這いずり回る兵隊を見た。
人が通った時に見上げていた彼の目つきが忘れられない。

みんな自分のことに精一杯で、誰も助けようとしなかった。この光景を見たとき、ふと「この人の家族は今頃どうしているのだろう。子どもがこんな状態になっているとは分らない。ウジ虫もいっぱいつけて這いずり回っている、それを他人である私が見ているんだね」と思った。このような死に方はしたくないと思っていたが、死体を見ると、どんな死に方でも「ああ羨ましいな」と思うようになった。ナゲーラ壕でお手伝いをしていた頃、若い中尉がけがで運ばれてきて一週間くらい意識不明の重体だった。その人が目を覚ましたとき、「軍医のやつ、また俺を生かしやがって」と言った。軍国教育を受けていた私は、彼がなぜこのようなことを言うのか当時理解できなかったが、自分自身も避難したことで初めてこの発言の意味が分かった。

避難中に遭遇した悲しい経験

避難中、馬小屋のそばの家に避難している家族がいたが、近くに弾が落ちて娘がけがをしたようだった。その父親が避難できる壕を探しに行ったがみんなに断られたため、彼は大きな声で「この辺の人とは嫁トウイ婿ドウイデシエーナランドー（この辺りの人とは嫁取り婿取りをしてはなら

ないよ）」と言っていた。この日に娘は亡くなった。

真壁では、ある母親がけがをした十二歳くらいの息子を置き去りにする場面に居合わせた。母親は乳飲み子を背負い、五、六歳くらいの子どもの手を引いて荷物も持っていた。私と一緒に避難していた親族の中に、耳が悪くて兵隊に召集されなかった二〇歳くらいの男性がいた。母親はこの人に「うちの財産を全部あげるから、息子をおんぶして逃げてくれないか」と泣いて頼んだが、自分も今死ぬかもしれない状況で誰も引き受けることはできなかった。その母親は、「せめて今無事な子どもだけでも」ということでけがをした息子を置いて避難した。息子は「お母さん、捨てて行くのか?」と言っていた。機関銃が屋根の上からパンパン撃たれていた中、お母さんは本当に仕方がなくやったのだと思う。彼女を責めることはできない。

その日のうちにアメリカ軍が集落に入ってきて幸いその息子も助けられ、母親も無事だった。しかし戦後、母親はその息子に事あるごとに当時の話をされて精神を病み、亡くなってしまった。

の志喜屋しきやに移動することになっていたが、なるべく遠くに行きたくなかった。先に捕虜に取られた人たちが道のそばにたくさんいて人混みになっていたので、その人たちに紛れて玉城村ひゃくの百名に逃げた。

百名では、若い人たちはアメリカ軍の洗濯などのお手伝いをしていた。軍作業にはトラックが送迎に来ていて、アメリカ軍と仲良くなるとチョコレートなどを貰うことができた。私の姉は参加していたが、私は行かなかった。

食べ物はくはアメリカ軍からチーズなどの配給はいきゅうがあった。みんなチーズに慣れていないので、温めて溶かして油にし、それで野菜などを炒めた。

百名で一年ほど生活してから、移動ということと他の人達と一緒に船越へ行き、その大きな空き家で五年ほど暮らした。人から聞いた話によると、目取真の私の実家は家の中の柱に紐を巻き付けられ、アメリカ軍の戦車二台で引いて壊されたらしく、屋根の瓦が落ちていた。父の出身地だった船越には自分たちの畑や田んぼがあったので、ほとんど不自由はしなかった。

船越にいた時には、親慶原おやげはらにあった知念ハイスクールへ通っていた。共学ではあったが教室は男女別だった。教科

書は全然ないので、先生が持ってきたプリントを使って勉強した。

卒業後は、玉城村かきのはなの垣花かきのはなにあった軍政府ぐんせいふ（MG = Military Government）のサプライイというところでタイプライター（今という事務のような仕事だった）として働いた。軍政府が一九五〇年に米国民政府べいこくみんせいふ（USCAR = United States Civil Administration of the Ryukyu Islands）になってからも働き続け、計十五、六年ほど勤めた。軍政府が垣花にあった頃は、道中はアメリカ兵がウロウロしていて船越から通うのは危険だったので、テントで造られた住居（「カンパン」と呼ばれていて垣花にあった）に四、五人で住んでいた。そこでは、船越から働きに出ていたのは私一人だけだった。職場が那覇に移ってからは私も那覇に住んだ。

その後は、那覇のハーバービューというアメリカ軍専用のクラブの事務所じむしょで本土復帰まで勤務した。

出征していた兄は、戦時中は部隊で鹿児島かごしまの山中にいたそうだが、遠くに飛行機が飛んでいるのを見ただけで悲惨な経験はしなかったようだ。

戦後の沖縄はとても貧しかった。子ども達はアメリカ兵が来たらワーワー集まり、彼らが投げってくれるチューイン

ガムやお菓子を競争して取っていた。

列車爆発事故で負った両手のやけどの痕は、戦後もずっと残った。若い時にはいつも腕を組んで手を隠し、人前に出ることを避けていた。あの事故によって私の青春時代はなくなった、人生を狂わされたと思う。

戦争は人間を人間でなくしてしまう

戦争は絶対にしてはいけないと思う。戦争は私たちが考える以上に惨いものだ。私の知人は嫁いで実家の家族と離れ離れに逃げることになり、鳥尻の戦場で自分の母親の死体を見つけたが、避難中だったので何もすることができず、そのままにせざるを得なかったと話していた。

また、人間はいざという極限状態になると人間が人間でなくなってしまう、自分の子どもを捨てるなどの行為をしてしまうこともある。戦争は一度でたくさんである。

(我那覇生作、西原里香による聞き取り 二〇一五、事務局による聞き取り 二〇二〇)

城間正信（昭和八年生まれ）

日本軍の駐屯 軍国主義教育 南部避難 收容所

将来の夢も希望もなかった学校時代

昭和十九年（一九四四）当時、私は大里第二国民学校（現在の大里南小学校の前身）の初等科三年生だった。家族は父と義理の母（実母は亡くなっていた）、弟の四人家族だった。

生徒たちは教育勅語を覚えさせられた。登下校時には、天皇陛下の写真が納められていた奉安殿の前でお辞儀をした。放課後に集落に帰ってからは、出征軍人の家で芋掘りなどのお手伝いをした。

学校に兵隊が駐屯するようになってから、授業は各集落の大きな製糖場などで行われた。私たち生徒も、兵隊が陣地を造るために掘り起こした土をざるで運ぶなどの作業をしたり、手旗信号を習ったりした。また、集落で空いている土地を耕したり、芋を植えたりする作業もさせられた。植えた芋は駐屯している兵隊に持って行った。軍国主義の時代で、これを「おかしい」と言う大人もいなかったが、そ